

シンパシーとエンパシーへ  
—JACTFL の次の 10 年に向けて—  
Sympathy and empathy

水口 景子 MIZUGUCHI Keiko<sup>1</sup>

## 1. 二つの共感

最近、ブレイディみかこ著の『他者の靴を履く—アナーキックエンパシーのすすめ—』を読みました。そこには、日本語ではともに「共感」と訳されている、エンパシーとシンパシーについて、彼女が英英辞書で確認した内容が書かれていました。

エンパシー (empathy)

他者の感情や経験などを理解する能力

シンパシー (sympathy)

1. 誰かをかわいそうだと思う感情、誰かの問題を理解して気にかけていることを示すこと
2. ある考え、理念、組織などへの支持や同意を示す行為
3. 同じような意見や関心を持っている人々との友情や理解

そのうえで、エンパシーは能力だから身につけるもの、シンパシーは内側から湧いてくるものだとしている。

鉄の女と呼ばれたサッチャー元英国首相は、身の回りで働く人々には優しく思いやりを示したが、自分が聞いたことが経験の外側にあると受け止めることができなかつた＝エンパシー能力が欠けていたのではないかと書かれていたことも印象に残りました。

## 2. 英語以外の外国語教育とのかかわり

私が、英語以外の外国語教育とのかかわりをもったのは、今も勤務している、公益財団法人国際文化フォーラムが、高等学校の中国語教育の事業に取り組んだことから始まっています。私自身、高校でフランス語を選択していましたが、1996 年当時、全国で 150 を超える高校に中国語の講座があることにとっても驚きました。孤軍奮闘状

---

<sup>1</sup> 所属：公益財団法人国際文化フォーラム The Japan Forum

況で、中国語を教えている先生方に会って話を聞く中で、私が感じたのはシンパシーだったと思います。そこから、昔風にいえばシンパ(同志)として、山積みの課題解決に取り組む日々が続きました。

そんな中で、JACTFL の前身でもある、複言語教育研究会に参加する機会を得ました。研究会のメンバーは、英語以外の外国語教育に熱心に関わり、英語以外のことばを学ぶ意味を常に問うている先生方でした。同じ言語を教えている仲間だけでなく、自分の教えている言語を超えて、外国語教育全体を、そして、自分が関わる教育段階にこだわらない、いわゆる横と縦のつながりの中で、ことばの学びが人を育てることの可能性をめざしていました。そういう人たちが集って創った JACTFL だからこそ、10 年間活動を続けてこられたのだと思います。

### 3. これからの 10 年に向けて

10 年間の JACTFL の活動の結果、すでに個人会員、賛助会員も含めると 300 近くなろうとしており、同志の数は大きく増えました。同じことに関心をもつ仲間が集まることで発揮できる力はもちろんあります。

では、これからは何をめざしてどのような活動を続けていくのがいいのか。2022 年 3 月の JACTFL 主催のシンポジウムで當作靖彦理事は、基調講演の最後を言語教育の究極の目標は、平和な世界を創ることであると強調されました。

英語教育に長くかかわっている、江利川春雄先生が著書の中で述べられている、「外国語教育の目的は世界の人々と平和的に共存するため」には、同じく英語教育の重鎮である鳥飼久美子先生も共感されていることを最近知りました。

私たちが、この究極の目標を達成するためには、社会の変化も視野にいれつつ、外国語教育の外の世界にいる人たちとの協働しての働きかけも必要になってくるでしょう。その際に必要になるのは、想像力を働かせて、その人たちのことを理解する力、まさしくエンパシーが求められるのではないのでしょうか。

冒頭にしたように、エンパシー能力です。JACTFL の一員としてその能力を身につける努力をし、多くの仲間とともに、大きな目標の達成に向けて活動していきたいと思っています。